日経新聞　　第3種郵便物認可

街づくり リノベにワクワク

岩槻 来年スクール ■ 草加 商店街に人戻る

空き店舗活用 高まる評価・期待

街づくりの中で空き店舗などの活用を考える「リノベーション」に関心が高まっている。県内では、草加市が3年前から取り組み、関係者の評価は高い。さいたま市も今年度から、豊かな歴史的背景を持ちながら空き店舗が目立つ東武野田線の岩槻駅周辺を舞台に取り組んでおり、関係者の期待が高まっている。

さいたま市は来年2月28日から3月1日にかけて、岩槻駅周辺の空き店舗を舞台に、チームで具体的な活用方法を探る「リノベーションスクール」を開く。これに先立ち、今月16日に岩槻駅近くの公民館で開いた「リノベーションまちづくり講演会」には、90人の定員に約130人が集まった。今回で3回目。参加者は毎回100人を大きく上回っており、関心の高さがうかがえる。

この日の講師で、リノベーション協議会副会長の大島芳彦さんは、空き家について「お互いに活用策を考えるようになれば宝の山、資源になる。シャッター商店街はワクワクする」と積極的な活用を呼びかけた。

リノベーション講演会には定員を超える人が集まった＝さいたま市岩槻区

すし店のカウンターを生かしてリノベーションした田中さん（中央）の店とオーナーの篠崎さん夫妻

地元に住む参加者で、会社経営の中山敬太さん(36)は「兄弟で、地域に根付いたカフェや（独立して働く個人が集まる）コワーキングスペースを作りたい。できればスクールに参加したい」と話した。

3年前から同様のスクールを開く草加市。同市住吉1丁目の「野菜とお酒のバル スバル」を経営する田中弟さん(38)は、たまたまスクールに参加したことで1号店になった。

そこは、旧日光街道に面した18年間閉まっていたすし店。田中さんは建築士やデザイナーらがいる10人の1人としてスクールに加わり、2階に住むオーナーの篠崎一男さん(79)、すみ子さん(73)夫妻の意見も聞きながら様々な活用方法を考えた。

結局、洋風のおばんざい店として、すし店の一枚板のカウンターなどの内装を生かしながら造り替えることになり、飲食店を開きたいと考えていた田中さんが経営する話になっていったという。このようにして、旧日光街道を中心に13カ所の空き店舗や空き地などが生まれ変わった。

不動産業者に仲介を依頼すると、内装などは取り壊して、一から作り直すことになり、オーナーもテナントも負担が大きくなる。いまも店の2階に住む篠崎さん夫妻は「リノベーションでよかった。もっと早くやってもらえばよかった。ほかにも店や施設ができて、寂れた商店街に人が戻っている」と喜んでいる。（松浦新）

ラグビーW杯選手に感激

パナソニック・ファンの集いに6千人

熊谷

ラグビーファンにW杯報告をした6選手。中央は富岡清・熊谷市長＝熊谷市上川上

ラグビー・トップリーグのパナソニック・ワイルドナイツのファンフェスティバルが28日、熊谷市の

障害者雇用率1.58％ 法定の値を下回る

県教育局、6月確定値

障害者雇用の水増しが昨年発覚した県教育局の6月1日現在の障害者雇用率